

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	テトラビリーブ		
○保護者評価実施期間	R8年 3月 24日		～ R8年 4月 5日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	30	(回答者数) 17
○従業者評価実施期間	R8年 4月 2日		～ R8年 4月 10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5	(回答者数) 5
○事業者向け自己評価表作成日	R8年 4月 10日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが安心して通所している。 子どもたちが通所を楽しみにしてくれている。 	<ul style="list-style-type: none"> 事業所の環境を常に清潔に保ち、利用者が安心して活動できるスペースを確保している。 利用者スタッフ、利用者同士の交流が様々な形で行えるように、様々なコミュニケーションツールを用意している。 	<ul style="list-style-type: none"> 個別と集団での取り組み内容をそれぞれ充実させ、支援につながる取り組み目づつましめる取り組みを考える。
2	<ul style="list-style-type: none"> 学習支援で学校で見切れないことに対応している。 家庭で見切れない宿題や学習に対応している。 	<ul style="list-style-type: none"> タブレットを使ったデジタル学習ドリルと利用者一人一人に合わせたプリント学習素材を用意し、個に合わせた学習支援に取り組んでいる。 学校との連携を適宜行い、学習の進行状況や宿題の個別対応で内容を確認し、学校での合理的配慮に対応している。 	<ul style="list-style-type: none"> なるべく楽しんで学習できるように、学習素材の見直しを適宜行い、そのデータを蓄積していくことで次の支援に生かすことができるようにする。
3	<ul style="list-style-type: none"> 登校するのが難しい子どもたちの居場所になっている。 学校に行けなくても学力の補填ができています。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者との話し合いを大切に、学校にいけない理由や学校でできていたことなどを分析し、利用者が利用可能な取り組みを考えている。 学校との話し合いを大切に、登校を目標とした取り組みをすることで学校側にも利用者が通所することを登校と認めてもらっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 進学に関して、様々な進路先を前提とした話し合いができるように、進路先についての知見を増やす。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<ul style="list-style-type: none"> 保育園や幼稚園との連携がなく、就学時の意向に関して特に取り組みがない。 	<ul style="list-style-type: none"> 利用者が小学生～中学生が中心となっており、未就学児の割合が極端に低いため、取り組みの優先順位が低くなってしまっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 近隣の保育園や幼稚園、利用者がある保育施設などから徐々に連携を進めていく。
2	<ul style="list-style-type: none"> 保育園や幼稚園、学校や地域の障害者施設との協体制の下での地域全体での取り組みはない。 	<ul style="list-style-type: none"> 利用者の生活範囲が広く、放射線状に様々な地域から通所しているために、取り組む地域を限定することが困難である。 	<ul style="list-style-type: none"> すぐ近隣にある稲毛区基幹センターと連携し、地域へのイベントの参加や相互の紹介などの取り組みを進めていく。
3	<ul style="list-style-type: none"> 保護者に向けた定期的なよりや、父母との交流や利用者の保護者同士の繋がりを生むような取り組みはしていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの保護者が共働き若しくは片親で就労しているため、保護者の負担を増やしたくない。 	<ul style="list-style-type: none"> 回数を抑えての父母参加型のイベントを企画し、利用者同士の交流が図れるようにしていく。 SNS型の情報発信だけでなく、事業所としての考えが伝わるように定期的なお便りの発信をする。